

文流義太夫演奏会

7月公演

義太夫協会

法人化50周年

記念公演

2021年7月18日[日] 13時開演

紀尾井小ホール

ご挨拶

一般社団法人義太夫協会会長 原道生

いつ終息するとも知れぬコロナ禍の中、本日は、私ども義太夫協会の「法人化50周年記念公演」にお運び下さり有難うございました。厚く御礼を申し上げます。

さて、当「義太夫協会」の発祥は、江戸時代の「義太夫因講」にまで遡るものであります。その後、明治期以降、何回もの改組・改称を経た末に、昭和三二年（一九五七）九月、東京を中心とする男女のプロ・アマの演奏家、および研究者や評論家、さらには鑑賞を楽しむ愛好家たちをも構成員とする「義太夫協会」として、新しく発足することとなつた組織です。

けれども、それは、まだその設立当初の時点では、法人格を持たない「任意団体」に過ぎなかつたために、公的な地位も低く、何かと意に満たないことも多くあつたので、かなり早い時期から、「法人化」を果たすということが、協会にとっての重要な事項の一つとして取り組まれてきていたのでした。

そして、そのような事態の中にあつて、副会長の豊澤仙廣師を中心に、関係者一同が努力を重ねた結果、当協会発足後十三年目の昭和四五年（一九七〇）六月に、東京都より、「社団法人」としての認可が下りたことによつて、「法人化」という、当時の斯界にあつては特筆すべき先駆的な念願がついに実現を見るに至つたのであります。

なお、本来の記念すべき「五十周年」は、昨令和二年六月になるのでありますが、当時の状況に鑑み、止むなく一年強の延期をいたしましたことを御理解の上、今後とも当協会に対しまして、一層の御支援をお寄せ下さいますようお願い申し上げる次第です。

令和三年七月

ご挨拶



一般社団法人義太夫協会元理事
竹本 弥乃太夫

法人化前から、義太夫協会とは密接に関わってきた。当時は男性ばかりで師匠方は協会、ことに義太夫教室に情熱を燃やされていた。

「長生殿」というと思い出すのは、作曲者である二代目豊澤松太郎師のことだ。清澄白河庭園のすぐ裏に居を構えられており、よくそちらに稽古に伺っていた。人数が多いと清澄白河庭園の奥座敷を借りていた。「長生殿」の時は竹本宗之助師、竹本喜久太夫師、豊澤猿若師、野澤吉平師、豊澤義三郎君など、十二名ほど集まつた。平成二三年に亡くなつた竹本綾太夫君は入つたばかりで、私も若手だった。稽古は厳しくも、窓の外は素晴らしい庭園の風景だったことが印象に残つてゐる。昭和三〇年代のことだ。最近では知る者が少ないということで、この度朱本を提供させて頂いた。

義太夫協会にはに入る人も少なく先を心配した時もあったが、現在では順調な様相を見せてゐる。今後とも益々発展していくよう尽力したい。

ご挨拶



一般社団法人義太夫協会理事
竹本 駒之助

盛夏の候、皆様におかれましてはご健勝のこととお喜び申しあげます。

いまだ新型コロナウイルスの終息が見えぬ中、「義太夫協会法人化50周年記念公演」にご来場くださいまして誠にありがとうございます。二度の延期を経て本日ようやく開催できますのも、ひとえに皆様のご支援のおかげと心より感謝申し上げます。

この五十年を振り返りますと様々な出来事がございました。特に昨年来のコロナ禍では邦楽界全体が大変な危機に陥りました。まだしばらく厳しい状況が続き、後継者不足という大きな課題も抱えていますが、この困難も皆で力を合わせて乗り越え、先人の方々の多大なご尽力のもとに設立された義太夫協会がこれからも末永く発展していきますよう、私も微力ながら協会のために力を尽くして参る所存です。

今後とも皆様方のご支援を賜りますよう、何卒どうぞよろしくお願い申し上げます。

女流義太夫演奏会7月公演

ご案内

鈴木桂一郎

義太夫協会
法人化50周年
記念公演

詞◎近松門左衛門
曲◎二代目豊澤松太郎

淨瑠璃 竹本 越京
淨瑠璃 竹本 綾一
淨瑠璃 竹本京之助
三味線 鶴澤三寿々
三味線 鶴澤津賀榮
三味線 鶴澤津賀花
囃子 望月太左衛門

長生殿

淨瑠璃 竹本 越京
淨瑠璃 竹本 綾一
淨瑠璃 竹本京之助
三味線 鶴澤三寿々
三味線 鶴澤津賀榮
三味線 鶴澤津賀花
囃子 望月太左衛門

ご挨拶

義太夫協会 会長
原道生

嫗山姥

久作 竹本 越孝
淨瑠璃 竹本駒之助
三味線 鶴澤津賀寿
ツレ 鶴澤 駒治
人間国宝 竹本土佐子
竹本綾之助
竹本土佐子
竹本 越若
竹本佳之助

新版歌祭文

高音 母 お 染 竹本 越孝
音線 お 染 竹本 越孝
三味線 竹本 佳之助
鶴澤 弥々 賀寿 宽也

長生殿 [ちょうせいでん]

【解説】

近松門左衛門作祝曲十二段のうち「長生殿」に、二代目豊澤松太郎が節付けしたものです。初演は昭和三十五年で、皇太子御成婚奉祝曲として竹本土佐廣・豊沢猿幸ほかの演奏でラジオ放送されました。以後祝曲として何度も演奏され、また、各流の舞踊会でも用いられています。

【詞章】

よわい久しき例には、千代にハ千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで、動かぬ形を現はせり。

扱て亦五番の嶋台は、明ぬる春の鶯の囀る声の美しく、立つや霞のうちよりも、色染めいだす梅の花、南枝北枝の初香り、長閑に風を含みつゝ、折を待ち得て桜花、末葉末葉に千代こめて。

万万歳と君が代の、年の数をば白妙の、浜の真砂と敷島や、かの貫之の言の葉を、爰に写して有そ海、つぼを並べて盃の、数重ぬれど湧く泉。尽きせぬ中の共白髪、さか行く末の久しきは、長生殿とぞ祝ひける。

嫗山姥○廓嘶の段

【こもちやまんば くるわばなしのだん】

【解説】

正徳二年（一七一二）大坂竹本座初演。近松門左衛門の作。近松作品は世話物が有名ですが、当初は時代物に力を入れていました。この作品は全五段の時代物で、源頼光と四天王主従の活躍が描かれていますが、現在は二段目の「兼冬館（廓嘶）」のみが上演されています。八重桐の「しゃべり」は、作品が書かれた当時、歌舞伎の名女形、荻野八重桐の芸を取り入れたと言われています。

【あらすじ】

源頼光が行方不明となり、許嫁である大納言兼冬卿息女沢潟姫はすつかりふさぎ込んでいました。その館で、元は夫婦であった煙草売りの源七（実は坂田時行）と傾城八重桐が偶然再会します。時行は父の仇を討つために、妻と離縁し旅立ったのですが、八重桐からすでに妹の糸萩が仇を討つたこと、そしてその糸萩を匿つたことから頼光が窮地に陥っていることを知ります。時行は己を恥じて自害するのですが、その際に『生まれ来

る子に頼光の敵を討たせるべく胎内に魂を残す。八重桐にも通力を授ける』と言ひ残します。八重桐は授かつたその力で、沢潟姫に横恋慕する右大将の配下を蹴散らして、彼方へと飛び立ちます。その後に八重桐から生まれたのが『坂田金時』です。

【詞章】

まつらがたひれふ
松浦潟領巾麾る山の石よりも、積る思ひはなほ重き岩倉の大納言兼冬卿の御娘、沢潟姫ともうせしは源頼光と、御縁辺の契約も互ひに待てば久方の月日重なり年もたち情盛りも徒らに、右大将高藤が讒言ゆゑ、頼光は行

方なく御文の音づれさへ、枯野に弱る秋の虫、世に便りなき憂きふしに、『もし御短慮の事もや』と御寝間の奉行寝ずの番、女中のほかは男交ぜずの大役は、女護の島に異らず。お局の藤浪御側に立寄り

「ナウこゝなお子。なぜに浮き／＼なされませぬ。それはさうと、煙草壳の源七はまだ見えぬか。気さく者とのほり者、今にも来たらお姫様まじくらに迎ひ鬼して遊ぶまいか」

「コリヤ氣の変つた思ひ付き、はやう煙草が来れかし」

「煙草々々」

と待つ宵の松葉煙草の柔こき、女中仲間ぞ賑はしき。昔は色に登りつめ、今は浮世に下り坂田の時行と、埋れし名も父の仇、晴らさんと思ふ志、厭あかぬ夫婦の仲をさへ三行半の生別れ、袖は涙の革行李を今は身過と引きかたげ

「刻み煙草油ひかず」
と売り歩く。
「そりや煙草が来たわ」
と腰元中。
「はやう／＼」
と呼入れ

「これ／＼源七まづこの革籠は預る。尻からげも下しゃいの。お姫様より御意がある。そなたも以前は歴々で悪性ゆえに仕損ひ、その姿になりやつたげな。傾城とやら廊とやら大内には珍らしき三味線の一曲を常々のお望みゆゑ、コレ三味線も調へ置く。サア／＼所望」とありければ

「ア、つがもない。もつとも以前は傾城の一つ買ひも仕り、三味線、胡弓、淨瑠璃、文作、のら一巻の諸芸なら、こっちへ任せておく座敷に吉野の山の連弾も、昨日の昔今日はまた吉野煙草の刻み売り、股引がけで三味線とは、茶漬にひしこの御望みひらさら御免」

と逃出づるを、女房たち引止めて

「ソレ／＼そのいひやうがもう面白い。なにをいふもお気慰めひらに頼む」と強ひられ、源七下地好きの道

「てんぼの皮やりませう」

と箱より出す三味線の、糸は昔に変らねど弾くその主のなれの果て。親のばち駒紙駒の音色優しく弾きなせり。紙衣の袖に置く露と、ともに離れし妹背の中、あはれ昔は全盛の、松の位も冬枯れし、風呂敷包み行く先是、知らぬ旅路にとぼ／＼と、築地の蔭に休らへば

「ヤア珍らしい三味線、なんぼ大内方でも」

洒落の浮世に廻り来る、車寄せより立聞けば

「ハ、ア、不思議やあの小唄は、わが身廊にありし時、坂田の藏人時行殿に馴初め、作り出せし替唱歌。かの人ならで誰が伝へた懷しや。どうぞ入込み見たいものぢや」

と出放題に声張上げ

「サア／＼これは難波の遊女町に、誰知らぬ者もない傾城の祐筆。濡一通りの状文なら恐らく私が一筆で、叶はぬ恋も仮名書筆、ひらりしやらりのかすり墨、生娘、遊女、妾者、^{てかけもの}後家、尼、人の女房まで段々の書分けは、私が家の伝授事。もしそんな御用ならお頼みあれ」

とぞいひ入れたる。奥には女中耳を澄まし

「さつても変った壳物。いざ呼入れて痴話文書かせてお慰み。更科、歌門呼んでおぢや」

「あい」

と答へて二人連れにて走り出で

「これなう傾城の祐筆殿はこなたか。この御殿の姫君なにやらそもそもじに御用あり。こなたへいざ」

と手を取れば

「ハア御用とはなにならんお目もじさまに」

と夕顔の庭の飛石すなくく、ちょこくくと奥座敷へ、なんの遠慮も並みゐたる、内裏上臈に場うてせぬ、いづれそれ者と見えにけり。煙草壳の源七もなに心なく側近く、顔と顔とを見合すれば、『ヤア離別せし女房。南無三宝』と木隠れの、女はそれと『みづ臭き男畜生人でなし。赤恥か、せて退けうか』と飛立つ胸も人目の閑、押鎮めく、心を碎き折々に後目に睨むも恋なれや。姫君なんの氣もつかず

「これなう紙衣。そなたの物ごし縷はづれ、いかさま常の女子でなし。さうしたなりになりやつたは、定めし深い訳あらん。一河の流れも他生の縁、包まず語りや」

とありければ

「ア、どなたかはお優しいお詞。お尋ねなくともいひたうて胸のたぐる折しも。さらばお咄しませう。恥しながら私が昔はうき河竹の傾城、荻野屋の八重桐とて太夫仲間の立者と、いはれしほどの全盛の末も遂げぬ仇恋に、登り詰めてこのとほり。夜なく變る大尽の、中にも坂田の某とて、水揚の初日より、ふと逢ひ初めて丸三年、なにが互ひの浮氣盛り、登るほどにく、どう利天の中二階、夜昼なしの床入に、かけ鯛様と異名を受け、水も漏らさぬ中なりしに、また同じ廓に小田巻といふ太夫、かの男に行きつきて毎日百通二百通、書きも書いたり痴話文は、大方馬に七

駄半、船に積んだら千石船、車に載せたらえいやらさ、木遣りでも音頭でも、祈つても呪うても微塵けもない二人が中。いよく募つて逢ふほどに、小田巻大きに腹を立て忘れもせぬ八月の、十八日の雨上り、月は山より朧染めの、襦ひらりと取つて捨て、白無垢一つに引つしごき、はぎもあらはに駆來り、私が膝にふうわりとんとろか、って、『これハ重桐、あんまり見られぬいやぢやぞや。サア男をたもるかたもらぬか、否か応か応か否か、二つに一つの返答が聞きたい』と、胸づくしを引摶む。こつちも一期の大事ぞと弱みを見せず、『コリヤ小田巻とやら管巻とやら、光は喰はぬ出直しや。この広い日本にかの人ならで男はないか。よしないにせよあるにせよ、それほどゆかしい男なら、なぜに先に惚れなんだ、男盗人の『傾城』といひざま取つて投げつければ明障子打破り、継三味線を踏砕き、縁より下へころくと、『這柏檜までこけかゝり、木こく南天めつきりく、切石の上へ真俯向け、鼻血は一石六斗三升五合五勺。』そりやこそ喧嘩が始つた。大事のこつちの太夫さんにひけをつけては叶ふまい。加勢をやれ』といふたほどに、遣り手、引舟、仲居、飯炊、出入の座頭、按摩取、巫女、山伏に占屋さん、雪駄片しに下駄片し、草鞋掛けで来るもあり、台所から座敷まで、『太夫様の仕返し』と、あそこでは叩き合ひ、こゝでは打ち合ひ踊り合ひ、茶棚竈、煙草盆、あたる物を幸ひに、打ちめぐ打割る、踏碎く。めりくびしやりと鳴る音に『そりや地震よ雷よ、世直し桑原々々』とわれ先にと逃げさまに、水たご盥にこけかゝり、座敷も庭も水だらけになるほどに、『南無三つなみが打つて来るわ。なう悲しや』と喚くやら、秘蔵の子猫を馬ほどな、鼠がくわへて駆出すやら、屋根では鮑が踊るやら、神武以来の慳気争ひ、この事世上に隠れなく、かの男はその場より、親御様の勘当受け、わが身も廓を夜脱けして根本恋路の浮名どる、鍋の蓋取る杓子取る、馴れぬ世帯のその日過ぎ、男めゆゑでござんする。ア、あんまりしゃべつて息が切れた。コレお茶一つ下さんせ』とぞ語りける。姫君を初め腰元衆

「さて心中の女郎や。たどへいかなる身になつても、思ふ男と添ふから
は、面白からう」

とのたまへば

「されば末を聞いて下さんせ。その男の父親が、闇討に討たれ敵討たねば
叶はぬと、私とは縁を切り行方もなう別れて、親の敵を狙ふとは跡かたも
ない赤嘘。わが身に秋風立ちけれども、なにをしほに退かれもせず、親御
様の死なしやんしたを屈竟一のかこつけに、敵討つとの口上は釈迦でも一
杯参る事。まんまと私をたばかり、女房には紙衣を着せ、その身はちゃんと
と榮耀らしい若い女中に立交り、三味線弾いてゐけつかり、くさりくさる
を見るやうな、日本國の姫御前の因果を一つに固めても、わが身にはおよ
ぶまい。初対面の皆様へ、ありし昔の懺悔話。お恥しや」

とばかりにておろ／＼涙にくれければ

「ヲ、道理々々身にかゝらぬこちとさへ、煙たうて堪られぬ。さりながら、
構へて短気な心を持ちやんなや。まだ話したいこともあり、奥へとほせ」

と姫君は御簾のうちに入り給へば

「サア苦しうない奥へおぢや、こちへ／＼

と人々は皆々一間に入給へば、跡見送つてハ重桐

「さらば奥へ参つて、憎とも憎し男の懺悔、いうて退けん」

と入らんとするを、時行取つて引戻しはつたと睨めつけ

「エ、さすがは流れの女ぢやな。親の敵を討つまでと、相対づくの離別な
らずや。たゞ今の詞は誰にいふ當てこと。いまだ敵の行方は知れず心を碎
く夫の体、哀れとも思はずおのれが榮耀に引当てて面白さうなあだ口、チ
エ、恨めしや」

とばかりにて無念涙にくれければ

「ホ、ヽヽヽヽム、あのまがく／＼しい顔わいの。コレ親の敵は幾人ある
ぞ。こなたの妹御糸萩殿とやらんが、先月廿三日、小夜の中山で討ち給ふ
物部の平太は敵ではないかいの」

時行はつと驚き

「ナニ妹が敵平太を討つたるとは必定か」

「サ定か、誠か。碓氷の荒童といふ人を語りひ、やす／＼と討つて源の頼
光様を頼み、駆込みしとは日本に隠れない。忝くも頼光様、妹御をかくま
ひ給ふ遺恨によつて、右衛門督平正盛、清原の右大将と心を合せ、頼光様
を讒訴し、勅勘の身となり給ふ。これほど大きな騒動を、今まで知らぬと
はうろたへ者の浮名を、世間へ触れうといふことか。エ、うとましい世に
連れて、心までが腐つたか」

と縋りついて泣きければ、時行突立ち

「さては敵ゆゑ頼光の御難儀となつたるとや。妹に先越され、親の敵は討
たずとも、正盛右大将は敵の敵なり、いで二人が首取つて頼光の御恩を報
じ、苗字の恥をそゝがん」

と躍り出づるを、引止め

「ソレ／＼／＼それは悉皆氣違ひか。討つに討たるゝほどならば、頼光様
に油斷があらうか。彼等は威勢真最中討たれぬ仔細があればこそ、日蔭の
御身となり給ふ。こなたが今駆出して心易く首取らうとは、重ねて恥がか
きたいか。コレこなたが今までいたづらで娘をころりと堕したと、首をこ
ろりと落すとは雲泥万里」

と恥しむる。時行道理に責められて行きつ戻りつ歯がみをなし、拳を握り
立つたりしが

「もうこの上の分別なし」

と革籠の中より氷のやうなる鎧通しあつ取り、腹にぐつと突立つる。女房

「これは狂氣か」

と縋りつけば

「アツ音高しく。おこが今のは悪言は伍子胥が吳王を諫めたる、金言よ
りなお重し。恐らくこの一念頃羽紀信が、勇氣にも劣るまじと思へども、
時来らねば力なし。それまでまだ／＼存らへ臆病者腰抜けと、指さゝれん

は無念の上の無念なり。われ死して三日がうち御身が胎内に苦しみあらば、わが魂宿りしと心得、十月を待つて誕生せよ。神変稀代の勇力の男子となつて、今一度人界に生れ出で正盛右大将を滅ぼさん。おことが身も今日より常の女に事かはり、飛行通力あるべきぞや。深山深谷を住家とし、生る、子を養育せよ。さらば／＼

と諸ともに、剣を抜けば紅の、血は夕立を争ひし最期の念ぞ凄じき。あら不思議や切口より焰の塊まろがせ女房が、口に入れば『うん』とばかりそのまゝ、息は絶えてけり。

「ヲ、さもさうすさまあらん。わが魂は玉の緒の、御命つゝがなく、行末待たせませ」

と姫君に一礼し

「今よりはわれいづくをそこと」

白妙の、三十二相の顔も怒れる眼もの凄く、島田ほどけて逆様に、たちまち夜叉の鬼瓦。唐門、楼門四つ足門、塀も築地も飛び越え跳ね越え、跳ね越え、飛び越え、雲を分け、行方も知らずなりにけり。

新版歌祭文○野崎村の段

【しんばんうたざいもん のざきむらのだん】

【解説】

安永九年（一七八〇）九月竹本座初演。作は近松半一（一七二八～一七八六）。お染久松の心中を扱った「袂の白しほり」（一七一）や「染模様妹背門松」から登場人物、筋書き、有名な文句までもそのまま使った「お染久松物」の決定版で、上中下の三巻からなっています。中でも上の巻「野崎村の段」は度々上演され、段切りの旋律は多くの人に知られています。

思つていました。久松が戻つたので、祝言をあげさせようとお光に支度をさせているところへ、かねてから久松と恋仲の油屋の娘お染が、後を追つて訪ねてきます。心中をも覺悟する二人に久作は意見して、別れることを納得させますが、お光は二人の気持ちは揺るがないと悟り、自分が尼僧になることで、二人と一緒にさせようとします。その様子を外で聞いていた油屋の後家は、前に久作が手代の小助に渡した金を尼への布施として差し出します。世間を憚り、久松は駕籠、油屋母娘は舟で大坂へと戻つて行くのでした。

【あらすじ】

油屋の丁稚久松は、集金した金を贋金とすり替えられ、野崎村の養父久作の元へ返されています。久作は重病で盲目となつた後妻、そしてその連れ子のお光と暮らしていますが、ゆくゆくは久松とお光を夫婦にしようとしています。

【詞章】

引き立て、入りにける。後に娘は、氣もいそく、

「日頃の願ひが叶ふたも、天神様や観音様、第一は親のお蔭。エ、こんな

事なら今朝あたり、髪も結ふて置かふもの。鉄漿の付け様挨拶もどふ言ふ

てよからやら」

覚束鱈拵へも、祝ふ大根の友白髪、末菜刀と氣も勇み、手元も軽ふちよき

ちよき、ちよき、切つても、切れぬ恋衣や、元の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、あとを慕うて野崎村堤伝ひにやうやうと、梅を目当てに軒のつま。供のおよしが声高に、

「もうし御寮人様。かの人に逢はふばかり、寒い時分の野崎参り。今船の上り場で、教へてもらうた目印のこの梅。大方ここでござりませうぞえ」

「アアコレもそつと静かにいやいなう。久松に逢ひたさに、来ごとは来ても在所の事、目立つては氣の毒。そなたは船へサ早ふ／＼と追ひやり追ひやり、

「物もふお頼みもうしませふ」

といふもこは暖簾越し、

「百姓のうちへ改まつた。用があるなら這入らしやんせ」

「ハイハイ卒爾ながら久作様はうち方でござんすかえ。さやうなら大坂から久松といふ人が今日戻つて見えた筈。ちよつと逢はして下さんせ」といふ詞つき姿かたち。

「常々聞いた油屋のさてはお染」

と悟氣の初物胸はもやもやかき交ぜ鱈俎押しやり、戸口に立寄り見れば見るほど、

「美しい。あた可愛らしいその顔で、久松様に逢はしてくれ。オホそんなお方はこちや知らぬ。よそを尋ねて見やしやんせ阿呆らしい」

と腹立ち声。心付かねば、「ホンニマア、なんぞ土産と思うても急な事、コレ／＼女子衆、さもしけれどもこれなりと」

と夢にもそれと白玉か露を袱紗に包のまま、差出せば、

「こりやなんぢやえ。大所の御寮人様、様々々と言はれても心が至らぬ置

かしやんせ。在所の女と悔つてか、欲しくばお前にやるわいな」とやら腹立ちに門口へはればほどけてばらばらと、草にも露銀芥子人形、微塵に香箱割り出した。中へつかつか親子連、出てくる久作。

「アどうぢやどうぢや鱈は出来たであらう。さて祝言のこと婆が聞いてきつい悦び。ぢやが年は寄るまいもの。さつきのやつともつさで、取りのぼしたか頭痛もする。ア、ゝゝいかう肩がつかへて来た。橙の数は争はれぬものぢやわいの」

「さやうならそろそろ私が揉んで上げませうか」

「ソリヤ久松忝い。老いては子に随へぢや。孝行にかたみ恨みのないやうに、コレおみつよ三里をするてくれ」

「アイアイ、そんなら風の来ぬやうに」

となにがな表へ当り眼、門の戸びつしやりさしもぐさ。燃ゆる思ひは娘気の細き線香に立つ煙。

「サア／＼親子とて遠慮はない。もぐさも痃痞けんびきも大掴みにやつてくれ」

「アイ／＼コリヤマアきつうつかへてござりますぞえ」

「さうであらうさうであらう。ついでに七九もやつてたも。オツトこたへるぞこたへるぞ」

「サア父様すゑますぞえ」

「アツアツアアア、アアえらいぞえらいぞ。ハ、ヽヽヽイヤモウモウあすが日死なうと火葬は止めにして貰ひませう。丈夫に見えても古家。屋根も

根太もこりや一時に割普請ぢや。アツ／＼」

「オオ父様の仰山な。皮切はもうしまるでござんす。ホンニ風が当ると思や。誰ぢや表を開けたさうな。締めて参じよ」と立つを、引止め、

「ハテよいわいの。昼中にうつとしい。ノウ久松、久松、久松、コリヤ久松。よそ見してゐずと、しか／＼と揉まぬかいの」

「サアよそ見はせぬけれど、覗くが悪い。折が悪い、悪い／＼」

と目顔の仕かた。

「や悪いの覗くのと、足に灸こそすゑてゐれ、どもおみつは覗きはせぬが」「サアアノ悪いと言ひましたは、確か今日は薬こう日。それに灸は悪い」とさうしたのでござります」

「エ、愚痴な事を。このやうに達者なは、ちよこくと灸をすゑ作りをする、そこで久作。アツくやつぱり熱いわいハヽヽヽ。ムなんぢやわい、わが身達も、達者なやうに、灸でもすゑるのがおいらへの孝行ぢやぞや」

「オ、さうでござんすとも。久松様には振袖の美しい持病があつて、招いたり呼出したり、憎てらしい、あの病ひづらが這入らぬやうに、敷居の上へエ、大きうしてすゑて置きたいわいな」「アツイ／＼おみつ、なんするぞい／＼。そこは頭ぢやがな／＼コリヤ、頭に三里があるかいやい。アアトツトモウ、えらい目に合はすがな、ハヽヽヽ」

「コレおみつ殿。振袖の持病のと色々の耳こすり、はしたない事聞いてはゐぬぞや」

「ホヽヽ、變つた事がお気に障つた」

「ホヽヽ、障らいぢや」

「コリヤをかしい。その訳聞くぞえ」

「いふぞや」

と我を忘れていさかいを、外に聞く身の氣の毒々、振りの肌着に玉の汗。

久作ももあつかひ、

「アヽ、コリヤヤイ、コリヤ肩も足もびり／＼するがなびり／＼。まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかひの取越しかい。灸行の代り喧嘩の行司さすのかやい。二人ながらエヽ嗜めたしなめ」

「イエヽ構ふて下さんすな。今のやうな愛想づかしも病づらめが言はしくつさるのぢやわいなア」

「ハヽヽヽなにをいふやらモウヽ両方ともおれが貰ひぢや。ヨヽヽ仲直

しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり鉄漿もつけたり、湯もつかふて花嫁御を、コリヤ作つて置け」と打笑ひ無理に納戸へ連れて行く。その間おそしこ駆入るお染。

「逢ひたかつた」

と久松にすがりつけば、

「アヽ、コレ声が高ぶござります。思ひがけないここへはどうして、訳を聞かして聞かして」

と問はれてやう／＼顔を上げ、

「訳はそつちに覚えがあらう。わしが事は思ひ切り、山家屋へ嫁入りせいと、残しておきやつたコレこの文。そなたは思ひ切る氣でも、私やなんばでもえ切らぬ。あんまり逢ひたさ懐しさ。勿体ない事ながら、觀音様をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ。二人一緒に添はうなら、ままも炊かうし織りつむぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しさと思ふもの。女の道を背けとは、聞へぬわいの胴欲」

と恨みのたけを夕禪の、振りの袂に北時雨、晴間はさらになかりけり、曇りがちなる久松も、背撫でさすり声ひそめ、

「そのお恨みは聞へてあれど、十の年から今日が日まで船車にも積まれぬ御恩。仇で返す身のいたづら。冥加のほども恐しければ、委細は文に残したどおり山家屋へござるのが母御へ孝行家のため、よう得心をなされや」と言へど、答も涙声。

「いやぢやいやぢや私やいやぢや。今となつてやう言やるは、これまでわしに隠しやつた、許嫁の娘御と女夫になりたい心ぢやの。ぜひ山家屋へ行けならば覺悟はどうから極めてゐる」と用意の剃刀取直せば

「それは短気」

と久松が止めて、とまらず、

「イヤ＼＼＼、そなたに別れ片時も、なに楽しみに生きてるよふ。止め

「そんならこれほどもうしても、お聞き分けはござりませぬか」と思ひ詰めたるその風情。

「そんならこれほどもうしても、お聞き分けはござりませぬか」

「添はれぬ時は死ぬるといふ、誓紙に嘘がつかれうかいなふ」

「ハアたつてもうせば主殺し。命に代へてそれほどまでに」

「思ふが無理か女房ぢやもの」

「叶はぬ時は私も一緒に染様」

「久松」

と互に手に手を取りかはす、悪縁深き契りかや。始終後に立聞く親。

「その思案悪からう」

と、言われて『はつ』と久松、お染。騒ぐを押へて、

「ア、大事ない大事ない。マア／＼下にゐや下にゐや。ハテマア下にゐやいの。ア、因縁とは言ひながら、和泉の国石津の御家中、相良丈太夫様といふれこさの息子殿、いささかの事で家が潰れてから、わが身の乳母はおれが妹、その縁で十の年まで、育て上げたこの久作は後の親。草深い在所に置こふより、智恵付けのため油屋へ丁稚奉公。それほどまでに成人して商売の道読み書きまで、人並になつたはコリヤコレ親方の大恩。若い水

の出端には、そこらの義理もへちまの皮と投げやつて、こなさんといつまでも、添ひ遂げられるにしてからが、戸は立てられぬ世上の口ぢやわい。

エ、あの久松めは辛抱した女房嫌うて、身上のよい油屋の婿になつたは、アリヤアレ、榮耀がしたさぢや、皆慾ぢや。人の皮着た畜生めど、在所は勿論、大坂中に指さされ、人交りがなりませうかいの。コレ／＼／＼ここ

の道理を聞分けて、思ひ切つて下され。コレ拝みます／＼、拝みますわいの。フムこれほどいうても返事のないはコリヤ二人ながら不得心ぢやの」

「ア、勿体ない。実の親にも勝つた御恩、送らぬのみか苦をかけるも、私が不所存から」

「イヤ／＼そなたの科ではない。みんなこの身の徒らから、親にも身にも

代へまいと、思ひ詰めても世の中の義理にはどうも代へられぬ。なるほど思ひ切りませう」

「オ、よう御合点なされました。私もふつたり思ひ切り、おみつと祝言致します」

「そんならそなたも」

「お前も」

と互に目と、目に知らせ合ふ心の覚悟は、しら髪の親仁。

「アノさつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたもるか」

「なんの嘘をもふしませふ」

「ム、娘御も今の詞に微塵も違ひはござりませぬか」

「久松の事はこれ限り、私や嫁入をするわいの」

「出来た／＼／＼。ア、むくつけな親父めと腹も立てず、よう聞き入れて下さりました。晩の間もしれぬ婆の命、息ある内祝言が済んだと聞かして下さるが大きな善根。善は急げぢや、おみつ／＼

と尻軽に立つて一ト間を差覗き、

「ハテ出ぐすみをしてをるわ。それでは果てぬ」

と手を取つて、

「サア／＼嫁の座へ直つたり／＼。一家一門着のままの祝言に改まつた綿帽子、エ、うつとしかろう取つてやろ」

と脱がすはずみに、こうがいも抜けて惜しげもなげ島田、根よりふつと切髪を、見るに驚く久松、お染、久作呆れて、

「コリヤどうぢや」

といふ口おさへて、

「コレもうし父様もお二人様も、なんにもいうて下さんすな。最前からなに事も残らず聞いてをりました。思ひ切つたといはしやんすは、義理に迫つた表向。底の心はお二人ながら死ぬる覚悟、ム、サ死ぬる覚悟でゐやしやんす、母様のアノ大病。どうぞ命が取りとめたさ。私やもうどんと思ひ

切つた。ナ、サ切つて祝うた髪かたち、見て下さんせ」

と両肌を脱いだ下着は白無垢の、首にかけたる五条袈裟思ひ切つたる目の中に浮む涙は水晶の、玉より清き貞心に、今更なんと詞さへ涙呑み込み、呑み込んでこたゆるつら々久松、お染。久作も手を合せ、

「なんにもいはぬこの通りぢや、この通りぢや。女夫にしたいばつかりに、そこら辺りに心もつかず、薔薇の花を散らして退けたは、みなおれが鈍なから、赦してくれ」

も口のうち、聞へ憚る忍び泣き。

「ア、冥加ない事おつしやります。所詮望みは叶ふまいと思ひのほか祝言の、盃するやうになつて嬉しかつたはたつた半時。無理に私が添はうとすれば死なしやんすを知りながら、どう盃がなりませうぞいな」

四人の涙ハツの袖。榎並ハケの落し水膝の、堤や越えぬらん。久作涙押拭ひ、

「どうやらかうやら合点がいたさうな。さぞ母御様が案じてござらう。大事な娘御確かな者に」

「イヤそれにはおよびませぬ。母が確かに請取りました」

と言ひつつ這入れば、

「ヤア母様。ハア」

『はつ』とばかりに詞なく差俯向けば、

「コレお染。野崎参りしやつたと聞いてあんまり氣遣ひさ。イヤ気慰みに

よからうと跡追うて来てなに事も残らず聞いた。夫婦の衆の親切、おみつ

女郎の志。最前からあの表で、私や拝んではばつかりゐましたわいなう。観

音様の御利生で、怪我過ちのなかつた嬉しさ。これから直ぐにお礼参り。

幸ひ私が乗つて來た、あの駕籠でコレ久松。そなたは堤お染は船。別れ別れにゐぬるのが、世上の補ひ心の遠慮」

「さやうでござりまするとも。お志ぢや乗つてゐにや」

「娘は船へ」

と親、親の、詞に否も言ひ兼ぬる、鴛鴦の片羽の片々に別れて二人は乗り

移れば、

「兄様お健でお染様、もうおさらば」

と詞まで早や改まるおみつ尼。哀れをよそにみなれ棹、

「船にも積まれぬお主の御恩。親の恵の冥加ない取り分けておみつ様。かうなりくだるも前の世の定り事と諦めて、お年寄られた親達の介抱頼む」

といひさして泣く音伏籠の面ぶせ。船の中にも声上げて、

「よしないわしゆゑおみつ様の、縁を切らしたお憎しみ堪忍して下さんせ」

「ア、わつけもないお染様。浮世離れた尼ぢやもの。そんな心を勿体ない。短気起して下さんすな」

「オ、娘がいふとほり、死んで花実は咲かぬ梅、一本花にならぬやうに、目出たい盛りを見せてくれ。随分達者で」

「ハイ／＼お前も御無事で」

「お袋様もお娘御もおさらば」

「さらば」

「さらば」

「さらば」

も遠ざかる船と、堤は隔たれど縁の引綱一筋に、思ひあうたる恋中も義理の柵情のかせ杭、駕籠に比翼を、引き分くる心々ぞ世なりけり。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります
※解説・あらすじとも一般社団法人 義太夫協会発行

一般社団法人 義太夫協会五十年略史

(敬称略)

義太夫協会法人化の経緯

義太夫協会——その生い立ちから法人化まで——

義太夫協会は、江戸時代後期に江戸の義太夫節の太夫・三味線・人形遣いが組織した「江戸因講」、そしてその流れを汲んだ一八九七（明治三〇）年発足の「東京因講」を源に、東京の地における義太夫節の演奏・指導を生業とする職業人の団体として発展してきた。昭和に入つてからは竹本素女を中心いて「女子部」が正式に新設された。

男女ともに盛んだった演奏活動は、第二次大戦終戦前後には中断を余儀なくされたものの、若い人材の育成の為、豊竹湊太夫ら有志が一九四八（昭和二三）年に「義太夫教室」を創設、翌一九四九（二十四）年には「日本義太夫協会」が活動を開始、「義太夫教室」が研究団体として「義太夫協会」を立ち上げるなど、義太夫復興の兆しが見え始めていた。「日本義太夫協会」は一九五〇（二十五）年に「義太夫因協会」と改称、女子部は同年に「女流義太夫連盟」を結成し、一九五一（二六）年一月から本牧亭公演を開始した。本牧亭に始まつた公演は、その後、形を変えながらも、現在の「女流義太夫演奏会」へと引き継がれている。

一九五七（三二）年九月、「義太夫因協会」は、研究団体「義太夫協会」と合併改組し、「義太夫協会」が誕生した。この新しい団体は、女子部を分けずに男女同格とし、本行と呼ばれる男性の太夫三味線、竹本と呼ばれる歌舞伎義太夫に携わる太夫三味線、女流の太

夫三味線の百二十二名を正会員とし（太夫：男性二十六名・女性四十四名／三味線：男性二十五名・女性二十七名）、そこへ素人で義太夫を演奏する人、義太夫を愛聴する人たちを「賛助会員」という形で加え、演奏家が会長・理事長・研究・評論の有識者が名誉会長・顧問を務める近代的な団体へと変革を遂げていった。芸術祭参加公演含むプロの本格的な公演の他、賛助会員の出演する演奏会も毎年開催し、定期的な会報の発刊も始まった。

社団法人への道——念願の法人化——

「義太夫協会」設立から三年後の一九六〇（三五）年、当時理事長であった豊竹湊太夫は、将来を担う若い正会員の為にも協会の地位向上を期し、いすれば法人化したいという希望を抱いていた。しかし、当時社団法人設立には五百万円（現在の約三千万円相当）という多額の基本金が必要であることや伝統芸能全般の低迷期ということで反対も多く、協会内部の足並みはなかなか揃わなかつた。ところが、一九六五（四〇）年頃から初代役員

達の引退や逝去が続き、それに危機感を持った正会員達は、一九六八（四三）年の秋、協会法人化で意志の統一に至るところとなつた。これには政財官の各界に広い人脈を持ち、法人化賛成派である豊澤仙廣副会長の並々ならぬ尽力があつた。仙廣副会長は文部大臣経験者や文化行政の関係者達に法人化の可能性を相談し、「伝統芸能の発展に望ましい」という大変明るい返答を得ることができた。それを受け早速五百万円という基本金の調達と定款・趣意書・予算書等の書類の作成に入り、一年後の一九六九（四四）年の秋、正会員、義太夫をこよなく愛する事業家や多数の賛助会員の浄財により、五百三十万円余の設立資金を集めることができた。それまで義太夫協会の顧問を引き受けっていた音楽学者の吉川英史が初代会長を引き受け、一九七〇（四五）年二月に文化庁へ申請書を提出、早ければ一九七一（四六）年末までには認可されるのではと目論んでいた。ところが文化庁から「四六年から基本金が大幅に引き上げられるので、文化庁ではなく東京都の法人としてなら年内に認可がされる可能性があり東京都に申請書を回した、直ちに東京都と折衝するよう」と突然の連絡を受けた。定款など東京都用に書類を差し替えて申請したところ、一九七〇年六月十六日付けという異例の早さで社団法人としての認可を得ることができた。社団法人化の構想から十年のことだつた。

社団法人義太夫協会の誕生とその後の活動は、義太夫節の伝統芸能としての社会的認知と地位向上に大きく寄与し、さらに十年後の「義太夫節」の国の重要無形文化財指定と、義太夫節保存会の設立に繋がるのだった。

新しい時代——法律改正により一般社団法人へ——

それから約四十年、様々な時代の波をくぐり抜けてきた義太夫協会は、新たに変革の時代を迎える。二〇〇八（平成二〇）年の公益法人法改正施行にともない、二〇一三（二五）年までに新たな基準での公益社団法人か一般社団法人を選択し、移行することが求められることとなつた。法律の改正で課せられる公益社団法人移行の諸条件は、義太夫協会の置かれた状況や今後の見通しでは厳しいであろうとの判断から、一般社団法人を選択して移行手続きに入り、二〇一二（二十四）年四月一日、一般社団法人義太夫協会として当時の波多一索会長の下での新たな船出となつた。

新法人は公益法人とみなされていた旧法人時代の財産や公益事業に付随する収入を計画的に使い切るという移行の条件があり、厳しい財務状況の数年を経ることとなるが、様々な改革を試み、財政面での立て直しを図ることができた。

そして幾多の方々の支えによつて、二〇二〇（令和二）年に法人として五十年という大

法人化後の活動——十年を一区切りとして——

法人としての全体的な活動・動向を中心まとめた。義太夫協会の事業の中でも重要な位置づけとなつてはいる「義太夫教室」については、二〇一八年に刊行された「義太夫教室七十周年記念誌」に詳しいので、ここでは概略と目立つた出来事のみとした。

公演事業については、女流義太夫演奏会は月例で数も多いため詳細は省いた。義太夫協会主催の特別公演、あるいは国立劇場等外部の主催による特別な公演は概略を簡単に記した。正会員有志・個人の活動も時代による傾向にとどめた。また、歌舞伎義太夫（竹本）に携わる正会員の活動については、毎月の歌舞伎興行への出演が主であり、特別な公演以外は省略した。

◆一九七〇年代（昭和四五～五四年）◆

【協会全体の動向】

七〇年六月、東京都を主務官庁とする社団法人として認可される。七月設立総会及び記念祝賀パーティーを上野タカラホテルにて開催。各界からの来賓多数で盛会。七三年から事務局に専任職員を置き、法人としての体制が整つた。七四〇九年文化庁芸術関係団体補助金の交付を受けた。

会報発行……七一年に創刊号、七二年二号、七四年からは年二、三回となり一九号まで発行された。

新年会等……七一年深川一力、七二年バスでの初詣、七三年本牧亭、七四年ほんもぐ、七五年ぎん鍋、七六年以降はほんもぐで新年会を開催。

祖先祭……従来は十月十日、両国の回向院にて。七〇年代は年末の十二月二十四から二十七日で開催。

総会・役員会……初代吉川英史会長以下、理事十六名、監事二名で始動した。各年とも定期総会・理事会・常務理事会等は滞りなく開催。七四年、七七年に役員改選。

会員動向……七二年時点で正会員は九十九名であった。七〇年代正会員としての入会は女流、竹本で十名を越えた。故人となつた正会員は二十二名であった。



設立記念祝賀会で挨拶に立つ豊澤仙廣副会長（当時）

【公演事業】

七〇年、東京証券会館ホールにて男女合同正会員公演が昼夜二公演で開催された。女流義太夫本牧亭公演は毎月一日から四日まで開催。七一年三～十月、本牧亭改装のため女流七三年から東京都主催（後に邦楽連合会主催都民芸術フェスティバル参加公演）の「邦楽演奏会」に男女一組ずつが出演。以後、毎年の参加となる。

七五年、文化庁芸術祭参加公演「義太夫名曲でつづる東海道」を三越劇場にて開催。贊助会員公演は長唄、清元、小唄など義太夫以外の音曲も含め、七〇年から七六年までは毎年開催され毎回盛況、会場は東京証券会館ホール、三越劇場であつた。

【普及事業】

義太夫教室……七〇年、法人の事業となつた「義太夫教室」の実施について検討、次年度内の開講を決定。七二年から七九年まで、開講の形態や会場の変遷をみながらも、着実に愛好者、プロを世に送り出していった。七二年二月～三月、義太夫教室二四期開講、初級は講義と実技、中級以降は実技のみ。定員二十名を大きく越える六十名応募、会場は銀座東三丁目町会事務所。その後同年七月、二五期開講、銀座東一丁目町会事務所。七三年からは年に一期毎の開講となる。七四年の二七期は、NHKの報道番組で稽古風景が全国に放映され大きな反響を呼ぶ。この期以降、発表会を設ける。七八年十月に義太夫教室創立三十周年記念研究発表会を開催、一期から三一期まで延べ七十名が出演し、NHKのテレビ番組に取材された。

教師のための講習……七四年以降、主に私学教師を対象とした講習会を出張も含め講義・鑑賞・実技で開催。七六年から年に数回、女流義太夫本牧亭公演の一日前の内一日をあてるなど、教育者への義太夫節認知をはかるための講習を積極的に開催。

学校巡回公演……児童生徒への直接的普及を目的として、公立・私立の中学・高校八百校に巡回の公募を行い、毎年数校にて出張公演を実施。七十年代前半は主に義太夫単独での公演だったが、七八年以降は八王子車人形との共演も頻繁に行われた。

竹本講習……七五年文化庁、国立劇場、松竹による歌舞伎義太夫（竹本）の人材育成事業開始、協会会員も協力し講師として参加。現在も歌舞伎音楽（竹本）研修として継続。

【その他】

七一年九月NHKラジオ第二放送「女義サワリ集」放送。七九年、ハワイ大学で半年の研究成果として忠臣蔵が上演され、竹本綾太夫が義太夫指導にあたつた。

◆一九八〇年代（昭和五五～平成元年）◆

【協会全体の動向】

八〇年、義太夫節が国的重要無形文化財に指定され、義太夫節保存会が設立。義太夫協会団法人化十周年と併せ記念祝賀会、記念演奏会が開催された。「義太夫節略年表」記念刊行。八〇年と八一年の民間芸術等振興費補助金事業に採択される。八一年、放送文化基金助成金に採択される。八五年、第七回松尾芸能賞伝統芸能特別賞を受賞。

女流義太夫後継者育成事業として、文楽の三世野澤喜左衛門、五世豊竹呂太夫による指導が始まった。八九年十二月、長年、女流義太夫演奏会の会場だった本牧亭が九〇年一月、閉席となることから、次の会場となる国立演芸場へ、見台その他一切の引越作業が行われた。

会報発行……年に二回、三回変則的に発行を継続、二〇号から四六号が発行された。

新年会等……花見懇親会、新春懇親会は八五年まで毎年開催された。

祖先祭……回向院にて八二年までは年末、八三年からは九月あるいは十月に開催。新年会等がなくなつてからは会員親睦の場でもあった。

総会・役員会等……各年とも理事会総会等滞りなく開催される。八三年、豊澤仙廣副会長勇退にともない、竹本朝重と竹本駒之助の二名が異例の抜擢で副会長就任。八六年、総会にて吉川英史会長が勇退、後任として田邊秀雄が新会長就任、会長以下十九名の理事、二名の監事の新体制となる。

会員動向……正会員個人のリサイタルや一門の会、外部公演への出演など、活発な演奏活動が行われた。八一年、八王子車人形らと共に国際交流基金の派遣で伝統芸能中南米公演に参加（竹本綾太夫・竹本駒之助・豊澤幸治他）。八六年、協会内に女流義太夫の発展に貢献した者への表彰として豊澤仙廣賞が制定された。副賞は株式会社十全（河野国声）提供。八六年は竹本朝重と竹本駒之助、八七年竹本綾一（現四代目綾之助）、八八年竹本越若、八九年竹本素丸が受賞。八一年協会事務局を担う竹本綾太夫が日本芸能実演家団体協議会（芸団協）理事に就任。八〇年歌舞伎義太夫の太夫として初めて重要無形文化財各個指定を受けた竹本雛太夫が逝去。

【公演事業】

女流義太夫演奏会は本牧亭で毎月二十日、二十一日の一日間開催を継続。その中で八八年、八九年には大阪の若手を招き東西若手交流会も行われた。国立劇場主催公演「女流義太夫の会」は好評を博す。八三年、本多劇場主催「二ツボン人の喜怒哀楽・語りものの世界」に竹本士佐廣らが出演、ひとみ座乙女文楽と共演。八三年、国立小劇場での義太夫節保存会主催、義太夫協会後援、吉川英史監修「女流義太夫の今昔—娘義太夫から人間国宝まで—」、八四年、三越劇場における「義太夫節三百年記念公演」は水上勉作・鶴澤重造作曲の新作

「観川」他披露。八五年、国立演芸場での義太夫節保存会主催「義太夫協会後援「近松半二名作集」はいざれも大盛況であった。外部出演では八七年、日本芸能実演家団体協議会主催公演「近松の世界」に竹本弥乃太夫が作曲、演奏で参加。鶴澤正一郎他が出演。八九年、四九（昭和二六年）年以来三十七年間続けられた本牧亭での女流義太夫演奏会は、本牧亭閉席に伴い十二月二十日が最終公演となつた。

【普及事業】

義太夫教室……八〇年、三三期開講、毎年五、六月に開講し、当初は平均で三十名前後が受講であつたが、十年間で年々受講生が増加し、八〇年代後半には五十名を越える期もあつた。八三年にNHK「邦楽百選」において教室風景が紹介されたこと、その後も新聞雑誌等でも度々記事となつたことなどが盛況の大きな要因かと思われる。八五年の三八期にはオーストラリア人女性、イタリア人男性の参加があつた。会場は八六年まで銀座三丁目東町会事務所、八七年から新橋演舞場別館スペース・アルファ。八六年からは教室OBによる演奏会が年一回開催されるようになり、各期の教室受講生の卒業演奏も同時に行われるようになつた。また八八年から義太夫教室への「一日体験教室」が年数回開催され、追加の回を設定するほどの盛況があつた。

教師のための講習……七〇年代に引き続き私学教師を対象とし、本牧亭での女流義太夫演奏会との連動、各学校への出張開催の併用で毎年数回実施。八五年には大阪府立文化情報センターでも開催された。

学校巡回公演……七〇年代に引き続き首都圏を中心に学校での出張公演を年数校行つた。中学・高校だけではなく大学での公演も実施されるようになつた。また八五年から八王子車人形との共演で各地のおやこ劇場・こども劇場で公演を行い、幅広い年齢層への義太夫節の啓蒙普及活動を開催した。

【その他】

八四年ティチクレコードよりLPレコード（四枚組）「女流義太夫・いま」が発売。NHK邦楽百選「女義の今昔」放映。八九年NHKイブニングネットワーク（夕方の首都圏報道番組）にて義太夫教室から生中継の放映が行われた。

◆一九九〇年代（平成二一～一一年）◆

【協会全体の動向】

九〇年一月、多くの方々の尽力により、この月から女流義太夫演奏会は国立演芸場が会場となる。国立演芸場では初めて落語・漫才等の寄席芸能以外が定期的に上演されることとなつた。当時の吉川英史名誉会長は、客席が座敷から椅子になつたことで、若い客層が増える好機になるのではないかと語つてゐる。九〇年代を通して文化庁、芸術文化振興基

金その他民間機関からの、女流義太夫演奏会、教室事業に対する各種助成に採択された。

一九七九年、長年女流義太夫を応援し、規模の大きい公演では度々印刷物を寄贈してくださつた高野印刷所社長により稽古場が用意され、若手を中心に大いに活用された。

八六年に創設された豊澤仙廣賞は、対象を正会員以外にも拡げ、一九〇年小林敏子、戸叶琢通（床世話）、九一年鶴澤駒登久、九二年鶴澤津賀寿、九七年秋山寿美子（事務局）、

九五年豊澤源平、九六年鶴澤駒登久、九二年鶴澤寬八、九三年鶴澤悠美、水野悠子（事務局）、

九八年をもつて豊澤仙廣賞の授与は終了した。

会報発行……四七号から六九号まで、数回の変則あれど概ね夏冬年二回発行された。

祖先祭……回向院にて九月あるいは十月に開催。竹本義太夫命日に近い時期での開催が定着した。初代竹本義太夫はじめ多くの義太夫関係者の墓碑がある回向院は、九二年に墓地整理が行われ、五月の落慶法要では女流による「野崎村」の奉納演奏が行われた。

総会・役員会等……各年とも理事会・総会等滞りなく開催される。一九〇年、協会の法人化を牽引した豊澤仙廣前副会長が逝去。九二年、総会にて役員改選。一九五年、役員改選で田邊秀雄会長が勇退、後任として景山正隆が新会長に就任した。若手からも理事が選出され世代交代も行われている。

会員動向……女流は中堅・若手ともにリサイタル、勉強会を積極的に開催。これまでとは違う斬新な会場、形式で新たな客層の開拓を目指す公演も増えた。九二年、女流義太夫初の人間国宝竹本土佐廣逝去。九四年、歌舞伎義太夫（竹本）の若手正会員が、深川座にて歌舞伎の舞台から離れた義太夫のみの企画公演に出演し好評を博した。九七年、若手有志による勉強会「じよぎ」が発足、お江戸上野広小路亭で奇数月一、二日に定席として開催されることとなつた。九〇年の贊助・特別会員の新入会は六十名弱だったが、九九年には十八名と下降状況となつた。

【公演事業】

九〇年代の女流義太夫演奏会は、国立演芸場に定席が移つたことによって、これまでの二日間開催から、九一年には月に一日の公演となつた。席数の多い国立演芸場に移つたことから、集客のための新たな企画が求められることとなつた。公演企画委員会が外部有識者を中心組織され、多角的な視点からの教師の為の講習とも連動し、企画公演が年に数回定期公演に組み込まれ、人形や他流との共演、テーマを絞つた番組構成が試みられた（公演企画委員：池田弘一・景山正隆・菊池明・竹内道敬・館野善二）。九四年、文化庁芸術祭主催公演「娘義太夫の今日—女流義太夫演奏会」が国立小劇場で開催され盛況であつた。

【普及事業】

義太夫教室……四二期から五二期が開講。引き続きのブームの中、多数の受講生を迎える盛況。以前よりは少なくなつたものの、教室終了後に各師匠へ入門し、義太夫を続ける人も

途切ることはなかつた。一日体験教室も毎回変わらず大盛況であつた。

教師のための講習・月例の女流義太夫演奏会とも連動し、九五年まで年二回程度実施。音楽学者、邦楽研究家により約二十年続けられた啓蒙活動であつた。

学校巡回公演……都内西部の学校が主な巡回先で、八王子車人形との共演が主だつた。

【その他】

一九一年、人間国宝・竹本土佐廣の手形が浅草公会堂前「スターの広場」に加えられた。日本創世の機運から、日本各地で農村歌舞伎が復活し、義太夫節の演奏、指導への問い合わせが数多く寄せられるようになつた。女流義太夫では、義太夫教室からプロも巣立つていたが、後継者不足は常に心配されており、会報でもプロ志望者の募集が呼びかけられた。一九八年、二十年間協会事務局に務め、九三年に退職した水野悠子による「知られざる芸能史娘義太夫スキャンダルと文化のあいだ」が中公新書から出版された。

◆一〇〇〇年代（平成一二一〇二一年）◆

【協会全体の動向】

二〇〇〇年、協会法人化から三十年の節目を迎え、九月にホテルアルシオンにて「感謝のつどい」を開催。「社団法人三十年の歩み」を刊行。この十年は協会の運営、事業の多方面で大きな変化があつた。

会報発行……七〇号から八九号まで、数回の変則あれど概ね夏冬年二回発行された。

祖先祭……回向院にて九月あるいは十月に開催。

総会・役員会等……各年とも理事会・総会等滞りなく開催される。一九一年、一九四年、一九七年、役員改選。一九五年、景山正隆会長が任期半ばで退任、一九四年から理事となつた波多一索が新会長に就任した。一九六年、法人化後の十六年間、会長として協会運営に尽力した吉川英史名誉会長が逝去。一九八年、長年副会長を務めた竹本朝重逝去。

会員動向……一九二年、女流では竹本綾一が四代目竹本綾之助を襲名した。女流は幅広い年代でリサイタル、勉強会を積極的に開催。若手有志による普及公演「ぎだゆう座」が、一九〇〇年からお江戸上野広小路亭で偶数月一、二日に開始される。九七年から続く「じよぎ」と共に、お江戸上野広小路亭では毎月一、二日は女流義太夫の会が開催されることとなつた。一九二年、久々に正会員と贊助会員の親睦会が開催された。会員数は一九〇年正会員八十二名、贊助・特別会員三百二十三名で、法人設立から三十年でやや減少。

【公演】

女流義太夫演奏会は国立演芸場にて月一回開催。毎月二十日前後だが月により日程は移動するようになつた。一九〇年九月公演は三十周年記念演奏会。一九二年、四代目竹本綾之助襲名公演は大盛況、会場に入りきれないほどの来場者であつた。

【普及事業】

義太夫教室……五三期から六二期まで毎年開講、毎年三月には〇B会・卒業発表会開催。

一日体験教室……義太夫教室への受講勧誘もあり、春夏二回の開催が定着。

学校巡回公演……八王子車人形、ひとみ座乙女文楽との共演で中学校を中心に巡回。その

他各地の人形座での研修、高等学校の歌舞伎授業へ講師を派遣。修学旅行で東京を訪れる中学生への義太夫ワークショップを開催。

【その他】

〇〇〇年、義太夫協会公式ホームページが開設され、公演、教室等の情報発信に欠かせぬツールとなつた。〇三年、水野悠子による「江戸東京娘義太夫の歴史」が法政大学出版局から、〇〇年、「娘義太夫一人名録とその寄席」が国立劇場芸能調査室より出版される。

〇九年、本牧亭時代に録音した女流義太夫の記録音源（オーブンテープ・カセットテープ）から貴重なものをデジタル化して保存する事業に着手、その中の一部を一般公開する「女流義太夫・本牧亭を聴く会」を開催。主催の変遷はあつたが、二〇二一年春までに十一回を数え、公開音源はCDとして発売されている。

◆一一〇一〇〇一一〇一二〇年（平成二二一〇令和二年）◆

【協会全体の動向】

一一年、甚大な被害となつた東日本大震災により、協会の公演中止も余儀なくされた。同年、七〇年の法人化の際に事務諸手続を担い、その後も事務局長を長く務めた歌舞伎義太夫の竹本綾太夫が急逝。一二年四月、公益法人法の改正により、一般社団法人へと改組。

これまでのような税制優遇はないが、一般企業同等の事業も実施することができるようになった。財政状況の改善のため、外部の実務経験者も交えた財政再建委員会が発足。提言を元に改革を行い、改善の兆しが見られた。一五年、本郷の稽古場兼倉庫が廃止され、稽古場は赤坂の豊川稻荷文化会館、倉庫は日本橋本町に移つた。一六年、長年銀座・築地周辺に置いた事務所を日本橋本町へと移した。大きな変革の十年であつた。

会報発行……九〇号から一一〇号まで夏冬年二回の発行。一一年夏の九三号からA4版となつた。一五年節目の一一〇号は、関係者の充実した寄稿により記念の号となつた。二〇年夏の号は、コロナ禍の影響で発行を見送つた。

祖先祭……回向院にて九月または十月に開催。この間、会員だけの参加から、一般への開かれた行事となり、法要の他に講演、演奏も併せて開催された。二〇年はコロナ禍のため開催を中止した。

総会・役員会等……一二年、一般社団法人への改組により理事は代表理事含め七名、監事

二名、任期は理事二年、監事四年となつた。各年とも理事会・総会等滞りなく開催される。この間一四、一六、一八年に役員改選。一六年、波多一索会長退任、後任は監事原道生が新会長へ、後任監事に矢内賢一が就任。波多前会長六月に逝去。一八年、総会にて定款の部分的な変更を行つた。二〇年の役員改選はコロナ禍のため全て郵送投票で行い、八月に総会を開催した。

会員動向……一三年、女流義太夫最長老であり、義太夫節保存会会長も務めた竹本越道が逝去。一六年、淡路在住の人間国宝鶴澤友路逝去。正会員、贊助・特別会員共に高齢化の波は免れないが、若手・中堅は積極的に他流との公演を企画し、新たな聴衆の開拓にも寄与している。一五年から新人養成特別研修制度を設け、特に女流のプロ育成を目指している。贊助・特別会員は、教室出身者など若年層の入会もやや増えている。

【公演】

女流義太夫演奏会は、一一年から会場がお江戸日本橋亭を主に、紀尾井ホール、国立演芸場の三ヵ所での開催となつた。一一年三月公演は、東日本大震災発生の余震、計画停電などを考慮し中止となつた。会員有志の自主公演「じよぎ」「ぎだゆう座」の他に、一四年から蕨市文化ホールくるるでは、くるるの自主事業として女流義太夫若手育成の公演「花のように香れ 女流義太夫」が定期的に開催されるようになつた。女流義太夫は、八王子車人形、ひとみ座乙女文楽などの依頼で海外公演への同行も頻繁にあつた。

【普及事業】

義太夫教室……六三期から七二期まで毎年開講、毎年三月には〇B会・卒業発表会開催。

一二〇年は「コロナ禍により入門コースを中止、実践コースも五名の定員で実施した。

一日体験教室……義太夫教室への受講勧誘も兼ね、春夏冬の三回開催となつていて、二〇年は「コロナ禍で中止。

学校巡回公演……文化庁が児童生徒の為に実施する全国的巡回公演に参加、ワークショップ付きのプログラムは巡回先の各学校でも好評。二〇年も感染症対策に配慮したうえで実施された（制作・古典空間）。

【その他】

一四年、クラウドファンディングによる資金調達を行い、寄贈された見台の修復を行つた。一九年、義太夫協会公式ユーチューブチャンネル開設。公演の情報発信にも活用。

【歴代会長】

吉川英史……在任期間●一九七〇（一九八六年
田邊秀雄……在任期間●一九八六（一九九五年
景山正隆……在任期間●一九九五（二〇〇五年
波多一索……在任期間●二〇〇五（二〇一六年
原道生……在任期間●二〇一六年（現在

【歴代副会長】

豊澤仙廣……在任期間●一九七〇（一九八三年
二代目竹本朝重……在任期間●一九八三（二〇〇六年
竹本駒之助……在任期間●一九八三（二〇一三年
四代目竹本綾之助……在任期間●二〇〇六（二〇一三年

【正会員の「重要無形文化財義太夫節」総合認定保持者】

*現役会員のみ

第一次（一九八〇年）……二名
第三次（二〇〇〇年）……六名
第四次（二〇〇九年）……十名
第五次（二〇一五年）……四名
第六次（二〇一八年）……四名

【正会員の「重要無形文化財歌舞伎」総合認定保持者】

*現役会員のみ

東京都台東区上野●本牧亭内……一九六九年（一九七一年
東京都中央区銀座●真光ビル「民俗芸能を守る会」同居：一九七一年（一九七三年
東京都中央区銀座●新橋演舞場別館……一九七四年（一九七九年
東京都中央区銀座●松本ビル……一九七九年（一九八二年
東京都中央区銀座●新橋演舞場地下二階……一九八二年（一九九六年
東京都中央区築地●松竹会館地下……一九九六年（一九九八年
東京都中央区銀座●松竹俱楽部（文明堂ビル）三階……一九九八年（二〇〇八年
東京都中央区築地●松竹別館三階……二〇〇八年（二〇一〇年
東京都中央区築地●東劇ビル一七階……二〇一〇年（二〇一七年
東京都中央区日本橋本町●日本橋永谷ビル二階……二〇一七年（現在

【正会員の重要無形文化財各個認定保持者（人間国宝）】

*物故者含む

五代目竹本雛太夫●歌舞伎音楽竹本……一九七八年認定
竹本土佐廣●義太夫節・淨瑠璃……一九八二年認定
鶴澤友路●義太夫節・三味線……一九九八年認定
六代目竹本駒之助●義太夫節・淨瑠璃……一九九九年認定
七代目豊竹嶋太夫●人形浄瑠璃文楽・太夫……二〇一五年認定
八代目竹本葵太夫●歌舞伎音楽竹本……二〇一九年認定

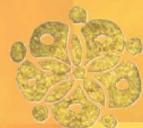
【正会員・役員の褒章・表彰】

吉川英史……一九七三年紫綬褒章、一九九四年文化功労者

二代目竹本朝重……一九九六年紫綬褒章

竹本駒之助……二〇〇三年紫綬褒章、二〇一七年文化功労者

【協会事務所の変遷】



主催◎一般社団法人 義太夫協会／義太夫節保存会
後援◎公益財団法人 日本伝統文化振興財団
助成◎邦楽振興基金助成事業